

# アカデミック・ライティング教育に関する 日本語教育学研究の課題と展望

—日本語の研究論文を対象とした研究の概観—

三谷 彩華\*

---

## 要 旨

「留学生受け入れ10万人計画」の発表以降、大学や大学院に所属する留学生数が増加し、アカデミック・ライティング教育の研究は徐々に研究成果を挙げ、現在では教材も種々出版されている。本稿では、日本語教育学分野において行われてきた日本語の研究論文を対象とした研究を、①本文に使用される語彙や表現の研究、②本文の構成や構造に関する研究、③要旨に関する研究の3つに分けて概観し、その課題と展望を述べる。

キーワード：アカデミック・ライティング教育、研究論文、要旨、文章構造、日本語教育

---

## 1. 本稿の背景と目的

本稿の目的は、日本語の研究論文を対象としたアカデミック・ライティング研究を概観し、アカデミック・ライティング教育に関する日本語教育学研究の課題と、今後の展望を述べることにあ

る。1983年の「留学生受け入れ10万人計画」の発表以降、日本の大学や大学院で学ぶ外国人留学生が増加し、「日本の大学での勉学に対応できる日本語力」(門倉2006)である「アカデミック・ジャパニーズ」の養成が課題とされ、アカデミック・ジャパニーズ関連の研究や教材開発も徐々に発表されるようになってきた。

門倉(2006:3-4)によれば、「アカデミック・ジャパニーズ」という言葉は、「日本留学のための新たな試験」調査協力者会議(2000)の報告書

において、「日本の大学での勉学に対応できる日本語力」と規定されているという。門倉(2006:9)は、アカデミック・ジャパニーズを「〈教養教育〉」としての「〈学びとコミュニケーション〉の日本語力」であるとした上で、「主体的な〈学び〉を触発する教育や、そのツールとなるような『学習スキル』教育もAJ教育研究にとって重要な隣接領域」(p.9)であると述べている。そして、アカデミック・ジャパニーズ教育研究と関連する教育研究として、「言葉の教育」「〈学び〉の教育」「学習スキル教育」の3つを挙げ、アカデミック・ジャパニーズは、これら3つがすべて重なる領域に位置付けられており、さらにその3つの各研究領域に関連するものとして、アカデミック・ライティング、クリティカル・リーディング、総合日本語などを挙げている。

このように、アカデミック・ジャパニーズ教育に関する研究は種々あるが、本稿では、「言葉の教育」と「学習スキル教育」の両方の要素を持つ教育として位置付けられている、「アカデミック・ライティング」を対象とする。アカデミッ

---

2021年11月30日受付

\* 江戸川大学 国際交流センター助教 日本語教育学

ク・ライティングは、「日本の大学・大学院における学術目的の書くこと」(大島 2003:198)であり、一般に、レポートや学位論文、研究論文といった学術的な文章が該当する。

学術的な文章の執筆には、「論文スキーマ」(村岡 2014:95)の形成が必要である。村岡(2014:95)は、「論文スキーマ」を以下のように定義している。

「論文スキーマ」は、「研究とは何か、論文とは何か」に関する概念知識の総体であり、したがって、研究や論文に関する知識的なものも、論文執筆を含む研究活動における手続き的なものも広く含むものとする。

日本語教育学の分野において、主に留学生の論文作成指導を目指した研究は、1990年代から行われ、2000年前後から研究成果が発表される(村岡 2014:6)ようになった。

本稿では、「論文スキーマ」のうち、「論文に関する知識的なもの」に焦点を当てる。本稿における「論文に関する知識的なもの」とは、論文には何がどのように書かれるかといった論文の表現特性を指すものとする。そして、アカデミック・ライティングの中でも研究論文を対象に、その言語表現の特性を解明しようとする研究を概観し(第2章)、課題と展望(第3章)を述べる。

## 2. アカデミック・ライティング教育における日本語の研究論文を対象とした研究

研究論文に何がどのように書かれるかといった観点で分析した研究には、①論文本文に使用される語彙や表現の研究、②論文の構成や構造に関する研究、③要旨に関する研究がある。①②については、主として「専門日本語教育」の分野で研究が進められている。「専門日本語教育」とは、「明確な特定のニーズに基づく日本語教育」(佐野 2009:10)である。「専門日本語教育」には、「専門別日本語教育(JAP)」、「職業目的の日本語教育(JOP)」、「生活者のための日本語教育」の3領域

あるが、研究論文に関する研究は、JAP (Japanese for Academic Purposes) に相当する。JAPの学習者グループについて、佐野(2009:12)は、「専門領域を持つ大学院生や研究生が中心であり、理工系、人文学系、社会科学系のそれぞれにまた細分化された領域がある」としている。

①、②、③は論文執筆のために論文の特性を明らかにした研究という点で共通しているが、①論文に使用される語彙や表現の研究、②論文の構成や構造に関する研究は研究論文の本文を対象としたものである。一方、③要旨に関する研究は、「要旨」を1つの文章として見なし、本文とは切り離して研究しているものが多い。

### 2.1 論文本文に使用される語彙や表現の研究

研究論文の語彙や表現の研究には、村岡他(1997)、村岡(1999, 2001)、深尾・馬場(2000)等がある。

村岡他(1997)は、農学系8学術雑誌における日本語論文全40編を対象に、使用頻度の高い動詞、イ形容詞、ナ形容詞、副詞、接続詞を調査し、それらの語彙が一部をのぞいて専門性が高いことを指摘し、さらに、その結果に基づいて農学系日本語論文の読解と執筆のための指導に関する考察を行なっている。

村岡(1999)は、農学系日本語論文の「材料および方法」で用いられる文型を調査し、文末の動詞は圧倒的にタ形が多く、特に「した」「行った」「用いた」「求めた」という動詞が高頻度で用いられていること、また、「～は」という主語が用いられやすいことを明らかにした。

深尾・馬場(2000)は、農学系、工学系学術論文全60編を対象に、論文に用いられる助詞相当語「に対して」の用法分析を行っている。「に対して」の用法は、「他の語句に置き換えられないもの」「『に』と置き換え可能なもの」「『について』と置き換えられるもの」の3グループに分類され、グループ別の出現頻度は、農学系と工学系では大きく異なっていることを明らかにした。

村岡(2001)は、農学系8学術雑誌における日本語論文40編の「結果および考察」において高

頻度で使用される文体を調査し、「結果および考察」では、文末の動詞がタ形や受け身形が多く用いられることを明らかにした。また、先行研究と比較し、論文の各「セクション」は、異なった文体的特徴を有していることを指摘した。

これらの研究成果は、留学生への指導に大いに役に立つと考えられる。特に、村岡（2001）は、本文の各セクションの文体の特徴を明らかにしており、論文作成の指導に直結するものであると考えられる。ただし、村岡他（1997）、村岡（2001）の対象とした論文のように、セクションが定められていない分野においては、筆者の主観により、セクション（章）が設けられることになる。そのような分野の分析には、客観的な方法により本文のセクションを定めた上で、表現の分析をする必要がある。

また、研究論文における引用の研究として、人文系論文における引用文の文末表現を研究した清水（2010）や、教材開発を最終目標として人文・社会科学系の引用・解釈構造を分析した山本・二通（2015）、引用・解釈表現の特徴を分析した生天目・大島（2018）がある。

山本・二通（2015）は、論文筆者がどのように資料を引用・解釈して結論を導いているのかの論理展開のための解釈構造を分析し、引用・解釈に関わる文には、「A 中立的引用文」「B 解釈的引用文」「C 引用解釈的叙述文」「D 解釈文」の4種があることを明らかにした。そして、これらの文がどのような論理展開をしているかの典型的なパターンを分析し、「BCDの効果的指導が論文指導の鍵を握っている」（p.107）ことを指摘している。生天目・大島（2018）は、歴史学・国際政治学・地域研究の「《資料分析型》」の論文を対象に、歴史資料の引用に基づいた叙述・解釈の表現の頻出表現と非頻出の特徴的表現の実態を調査している。

山本・二通（2015）は、単なる引用表現の分析にとどまらず、引用内容がどのように展開されているかまで明らかにしているという点で意義深い研究である。

## 2.2 論文の構成や構造に関する研究

②研究論文の構成や構造に関する研究には、(1) 本文全体の研究と、本文の序論部分、本論部分、結論部分といった(2) 特定の部分に限定した研究がある。

### 2.2.1 本文の全体構造の研究

(1) 本文全体について言及した研究には、斎藤他（1977）や佐久間（1997）、佐渡島・吉野（2008）、二通他（2009）、宮田他（2012）等があり、学術論文の本文の全体構成を示している。

斎藤他（1977:61-86）は、学術論文の構成について「論文では、『序論』『本論』『結論』という三つの部分があるのが普通」（p.67）であり、論文を書く際には、骨組みがなければならず、「全体を何章に分けるか、それぞれにどれだけの分量を割り当てるかをまず考えて、研究の進化とともにその構成を修正しながら、論文の執筆を進めるのが能率的」（p.69）だと述べている。

佐久間（1997）は、日本語学の論文は、研究対象や領域により、「a. 理論的方法」「b. 実証的方法」「c. aとbの複合した方法」の三つの研究方法が考えられるが、いずれも、「序論・本論・結論」の三段構成が基本であるとしている。

佐渡島・吉野（2008:124-131）は、文献研究（「既に存在している資料をもとに、新たな発見を導き出す研究手法」（p.124）と実証研究（「何らかの体験を持ってデータを作り出し、新たな発見を導き出す研究手法」（p.128））の論文の構成例を示している。

二通他（2009）は、「検証型論文」「論証型論文（文献解釈系）」「論説型」「複合型」の各構成を示しており、研究の目的や方法により、構成に差異があることを示している。

これまでの研究により、論文本文が「序論」「本論」「結論」の三段構成で書かれることは明らかだが、根拠となる数量的なデータは示されていない。

宮田他（2012）は、分野を問わない全1172編（国内集合490編、国際集合682編）の学術論文

を収集し、学術論文の中に現れる構成要素と、見出しに基づいた構造の調査を行なっている。その結果、構成要素においては、国内集合と国際集合との間に大きな差はなく、ほとんどの場合、「論題」「著者」「所属」「抄録」「引用文献」が書かれていることが明らかになった。一方で、雑誌固有コード (ISSN, DOI) には大きな違いがあり、要因として、国際集合の学術論文が、人文学の論文を多く含んでいたことを挙げている。また、見出しに基づいた構造の調査においては、「Introduction 以外は、明示的な構造をもたない」論文が最も多いことが明らかになった。次いで IMRAD (Introduction (序論), Material and Methods (材料と方法), Results and Discussion (結果と考察)) 形式が多く、IMRAD 形式が学術論文の主流であるとしている。さらに、分野ごとに調査をすると、生物化学、科学、医学、産業では IMRAD 形式で書かれている一方、人文科学分野では、IMRAD 形式とは遠い形式が取られていることが明らかになった。

宮田他 (2012) の構造の調査は、見出しのみで判定されたものであり、記述内容による分析は行われていない。見出しには個人差があり、執筆者本人による見出しを基準として分析すると、一般化が難しくなる。研究論文の構造を明らかにするためには、記述内容による分析が必要である。

以上のように、本文全体の研究においては、主として構成を明らかにするものが多く、記述内容により本文全体の文章構造を明らかにしたものは見当たらず、今後の課題であるといえよう。

## 2.2.2 「序論」の研究

「序論」「本論」「結論」の (2) 特定部分に限定して分析した研究は、「序論」を主として 1990 年以降に研究がされてきた。

「序論」を研究したものには、佐藤・仁科 (1996)、杉田 (1997)、村岡他 (2005)、木本 (2006)、大島他 (2010) があり、序論に書かれる構成要素と展開を明らかにしている。

佐藤・仁科 (1996) は、工学系学術論文全 14 編の序論を対象に、文および文段レベルで「どのよ

うな記述事項がどのように配列されているか」(p.28) を検討し、序論への記述事項として「A 対象の意義の指摘」「B 課題の提示」「C 研究史の記述」「D 研究経過の報告」「E 研究の概括」の 5 つを挙げ、序論の構成の型として、「意義指摘型」「課題提示型」「複合型」を提示した。そして、「『絶対的』とは言えないにせよ、学術論文の序論の構成には、ある法則が存在するようだ」(p.32) と主張している。

杉田 (1997) は、日本史学関連論文の全 30 編の序論を対象に、「書き手がどのようなコミュニケーション上の意図を伝えようとしているかを文ごと (接続助詞等で切れる場合は節ごとに)」(p.52) に検討し、4 つの「構造的要素」と下位項目 16 があることを明らかにした。

村岡他 (2005) は、農学系・工学系日本語論文の 3 段落構成・4 段落構成の「諸言」全 180 編を対象に、内容を 4 つの構成要素に分類し、形式段落により、構成要素の位置を特定した。そして、接続表現等にも着目し、論理展開のパターンを分析している。分析の結果、諸言の文章には、「領域提示 (A)」「研究動向提示 (B)」「課題設定 (C)」「論文概要紹介 (D)」の各要素が特定の段落に配置されやすいことが明らかになり、論文作成には、「段落、構成要素および論理展開をさせる特徴的な表現を関連づけ、内容の読解を行いつつ論理展開を学ぶことが効果的である」と述べている。しかし、形式段落内に複数の要素が書かれる論文も散見されることから、形式段落よりも細かな分析単位を設定し、分析する必要があると考えられる。

木本 (2006) は、Swales (1990) の CARS を分析のモデルとして用い、法学系論文全 135 編の序論の文章構造を特徴的な文型や表現、文と文との意味的なつながりにより分析し、構造的特徴を明らかにした。要素として「ムーブ 1. 研究領域の提示」「ムーブ 2. 研究の必要性の提示」「ムーブ 3. その論文についての説明」と下位項目 13 を挙げ、典型は、「要素 1 → 2 → 3」と展開していることを明らかにした。

これらの研究は、特定の分野に絞り込み、その

分野の特徴を明らかにしたものであるが、分野横断的に序論の構造を分析した研究として、大島他(2010)がある。

大島他(2010)は、人文科学系・社会科学系・工学系の3領域14学会誌に掲載された研究論文全270編を対象に、先行研究を踏まえて「導入的要素」(「a」研究の対象と背景の説明, 「b」先行研究の提示・検討, 「c」研究目的・研究行動の提示)を設定し、分野ごとに、どの程度共通点と相違点があるのかを検討した。さらに、「導入的要素」が序論(冒頭章)以外にも現れるケースに着目し、「導入的要素」の冒頭の章を超えた現れ方についても、他分野間の比較分析を行った。

その結果、「導入的要素」がa→b→cの順で展開されることを分野間の共通点として確認した一方で、工学系論文の序論は定型性が高いこと、経営学、社会学、建築工学の計画系では、「先行研究の説明」が独立した章で書かれることがあること、「c」研究目的・研究行動の提示」が冒頭章以外で現れる「課題設定再帰型」が人文系・社会科学系に多く見られることを明らかにした。

上述の研究は、CARS (Swales 1990)の要素と日本語で書かれる序論の展開が類似しているという点で共通している。また、大島他(2010)の横断的研究により、序論の要素や展開には、分野を超えて共通する点もあることが明らかになった。

### 2.2.3 「本論」の研究

本文の本論の構成要素と展開を明らかにした研究には、村岡(2002, 2007)と佐藤他(2013)の研究がある。

村岡(2002)は、農学系論文全41編の「結果および考察」に相当するセクションを分析し、よく用いられる接続表現の位置と機能から、論理展開を考察した。その結果、「結果の記述を事実文として示すフレーム」「引用文献の内容をそのままあるいは完結に要約して述べるフレーム」「結果や引用内容をもとに推論を行うフレーム」が重層的にパラグラフを構成していることが明らかになった。内容だけではなく、形態的な指標である

接続表現から論理展開を明らかにしたという点で意義がある研究である。

村岡(2007)は、農学系3学会誌に掲載された45編の論文の考察部(論文内のセクション名が「考察」となっているもの)を抽出し、考察部の構成要素は「(1)考察の議論に関するタイプ」「(2)結論を示すタイプ」に大別されることを示した。さらに、(1)の「記述内容の枠組みを示す構成要素」(「先行研究引用」「結果提示」「推論」「目的提示」「方法提示」「補足説明」)に着目して分析した結果、「推論」「結果提示」「先行研究引用」の出現頻度が圧倒的に高いことや、これら3要素が複数組み合わせられて考察部を形成していることを明らかにした。

しかし、1つの構成要素のみで1段落を形成しているものは少なく、複数の要素が組み合わせられて1段落を形成しているものがあることから、より具体的な指導のためには段落内部に踏み込んだ分析が必要であることを示していると考えられる。

佐藤他(2013)は、人文科学、社会工学、工学の計270編の日本語学術論文を対象に、「中間章」を15の構成要素により分析している。その結果、「<実験/調査型>」「<資料分析型>」「<理論型>」「<複合型>」の基本類型とその下位分類として、11の構造型を明らかにした。工学領域では、「<実験/調査型>」が圧倒的に多かった一方、人文科学・社会科学では、多様な構造型が確認された。論文の構造型は、研究主題や研究方法に応じて選定されるものであると述べている。

### 2.2.4 「結論」の研究

本文の結論の研究には、村岡(2006)の理系日本語論文の「緒言部」と「結論部」の「呼応的關係」を分析したものがある。工学系3学会誌に掲載された全90編の論文から謝辞を除いた結論部の文章を村岡他(2005)の緒言部と比較し、緒言部の「論文概要紹介」と結論部の「論文概要再提示」と「成果提示」の2構成要素と比較している。その結果、「呼応的關係」は3パターンあり、「『紹介』の内容が『再提示』の内容にほぼ相当」する

結論部が7割以上と典型的であることが明らかになった。村岡（2006）の研究は、「緒言部」の「論文概要紹介」がどのように「結論部」と呼んでいるかを明らかにしたものであり、結論部の構造については触れていない。「結論」の構成や構造の研究が少ないのは、分野によっては、結論が考察章にまとめて書かれることがあり、結論章の範囲が定められないためだと考えられる。

2.2 で示した以上の研究は、研究論文の本文にどのような要素をどう展開させて書くかということ进行分析し、各分野の特徴や異同を明らかにしたという点で、意義がある。また、人文科学系分野の研究論文が理系論文の典型とされてきたIMRAD形式と遠い形式であることを示したのは、日本語の研究論文執筆の指導にとって重要な指摘であろう。

### 2.3 要旨に関する研究

研究論文の要旨に関する研究には、澤田（1993）や村田（2009）の要旨に用いられる表現の研究、王他（2009）、李・王（2011）、三谷（2017、2018）の要旨の構成や構造を分析した研究がある。

澤田（1993）は、「日本語に関する学術論文」の要旨全65編を対象に要旨と本文の表現を比較している。その結果、要旨の表現が本文の「序論」「結び」に集中すること、要旨の表現は本文と同じ表現ではなく何かしらの表現で言い換えられている可能性があることを指摘した。

王他（2009）と李・王（2011）は、要旨の対照研究を行っているが、これらの研究は、本文との対応関係は分析されていない。

三谷（2018）は、要旨の文章構造と要旨に書かれる内容が本文のどの大段落から使用されているかを明らかにし、要旨が本文の「序論」「本論」「結論」の大段落構成と類似していることを指摘した。しかし、要旨を文段という単位により分析した一方で、本文は章立ての見出しによる大段落で分析しており、分析単位が異なっている。要旨と本文を対照するには、同じ分析単位を用いる必要があると考えられるが、本文全体の文章構造分

析は今後の課題としている。

## 3. アカデミック・ライティング教育に関する日本語教育学研究の課題と展望

第2章では、アカデミック・ライティングの中でも研究論文を対象に、その言語表現の特性を解明しようとする研究を概観した。特に、①論文本文に使用される語彙や表現の研究、②論文の構成や構造に関する研究については、例えば二通他（2009）等、実証的な研究成果の蓄積が、既に教材化され教育現場で活用されており、まさに現在のアカデミック・ライティング教育の根幹をなしたものである。

一方で、第2章で概観した研究について、次のような課題も考えられる。

第一に、論文筆者の主観に捉われない分析単位の検討である。人文科学分野では、IMRAD形式とは遠い形式が取られていることが明らかになっている（宮田他 2012）ように、セクション（章）の立て方は論文筆者に委ねられている。また、2.2.1 で述べた序論の構成要素の研究は、構成要素の分析単位が一定でなく、計量的な観点においては研究の余地がある。字数制限がある研究論文執筆においては、構成要素の計量的なバランスを知りことも初学者の助けになると考えられ、例えば、全体に対して各構成要素がどのくらいを占めているかといった割合を示すなど、論文筆者の主観によって定める形式段落数や文数ではない示し方や分析単位の検討が必要である。

第二に、本文の全体構造の分析である。2.1 や 2.2 で述べたように、記述内容によって研究論文の構成や構造を分析した研究は、本文の序論部分、本論部分、結論部分といった特定の部分を分析した研究が主である。本文全体の文章構造や構成要素相互の関係を明らかにしようとする分析は今後の課題とされており、序論、本論、結論をこえた分析をしているのは、村岡（2006）に限られているようである。研究論文という一つの文章が、どのように開始し、展開され、まとめられていくかといった本文全体の文章構造を明らかにす

る研究が待たれる。

第三に、要約文研究の分析観点を導入した要旨分析である。要旨は、要約文の一種であるにもかかわらず、従来の日本語教育学における要旨研究は、本文のどの部分をどのようにまとめたかといった要約の観点の分析が不十分である。日本語の要約文研究には、要約文とその原文の文章構造を明らかにした上で「残存認定単位 (ZT)」や「情報伝達単位 (CU)」を用いて原文の単位がどのくらい要約文に残存しているかを明らかにした佐久間編著 (1989, 2010) の研究や、「アイディアユニット (IU)」を用い、どのような方略を用いて要約文を作成しているかを明らかにした邑本 (1992) や町田 (2008), また、原文の内容を要約文にどのようにパラフレーズしているかを分析した鎌田 (2015) 等がある。これらの研究の知見を生かした分析による要旨の解明が望まれる。

#### 4. 本稿のまとめ

本稿では、アカデミック・ライティング教育に関する研究として、日本語の研究論文を対象とした日本語教育学研究を①論文本文に使用される語彙や表現の研究、②論文の構成や構造に関する研究、③要旨に関する研究の3つに分け、概観した。これらは、「論文スキーマ形成」に欠かせない論文に関する知識であり、研究成果を生かした教材開発が今後も期待される。一方で、本稿では、日本語の研究論文を対象とした日本語教育学研究の課題として、①論文筆者の主観に捉われない分析単位の検討、②本文の全体構造の分析、③要約文研究の分析観点を導入した要旨分析を挙げた。

日本語の研究論文における表現特性を実証的に明らかにする研究が、今後も様々な研究アプローチによって展開されていくことで、新しい知見をもたらし、アカデミック・ライティング教育の可能性をさらに広げていくことに期待したい。

#### 付記

本研究はJSPS 科研費 20K13090 の助成をうけたものである。

#### 参考文献

- 大島弥生 (2003) 「日本語アカデミック・ライティング教育の可能性—日本語非母語・母語話者双方に資するものを目指して—」『言語文化と日本語教育』増刊特集号, pp.198-224
- 大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子・二通信子 (2010) 「学術論文の導入部分における展開の型分野横断的比較研究」『専門日本語教育研究』12, pp.27-34
- 王敏東・趙珮君・仙波光明 (2009) 「学会誌の『要旨』の考察—日本と台湾における日本語学/日本語教育の論文の場合—」『言語文化研究 徳島大学総合科学部』17, pp.103-122
- 門倉正美・筒井洋一・三宅和子編 (2006) 『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房
- 鎌田美千子 (2015) 『第二言語によるパラフレーズと日本語教育』ココ出版
- 木本和志 (2006) 「法学系論文の序論に見られる文章構造の分析—民法、商法、知的財産権系論文を対象に—」『専門日本語教育研究』7, pp.19-26
- 斎藤孝・西岡達裕 (1977) 『学術論文の技法』, 日本エディターズスクール出版部
- 佐久間まゆみ (1997) 「論文の構成と書式」『ハンドブック論文・レポートの書き方』明治書院, pp.260-266
- 佐久間まゆみ編著 (1989) 『文章構造と要約文の諸相』くろしお出版
- 佐久間まゆみ編著 (2010) 『講義の談話の表現と理解』くろしお出版
- 佐藤勢紀子・大島弥生・二通信子・山本富美子・因京子・山路奈保子 (2013) 「学術論文の構造型とその分布—人文科学・社会科学・工学270論文を対象に—」『日本語教育』154, pp.85-99
- 佐藤勢紀子・仁科浩美 (1996) 「工学系学術論文における序論の構成の分析」『東北大学留学生センター紀要』3, pp.26-34
- 佐渡島紗織・吉野亜矢子著 (2008) 『これから研究を書くひとのためのガイドブック』, ひつじ書房
- 佐野ひろみ (2009) 「目的別日本語教育再考」『専門日本語教育研究』11, pp.9-14
- 澤田深雪 (1993) 「学術論文の要旨の表現特性」『表現研究』57, pp.18-27
- 清水まさ子 (2010) 「先行研究を引用する際の引用文の文末表現—テンス・アスペク的な観点からの一考察」『日本語教育』147, pp.52-66
- 杉田くに子 (1997) 「上級日本語教育のための文章構造の分析—社会人文科学系研究論文の序論—」『日本語教育』95, pp.49-69
- 生天目知美・大島弥生 (2018) 「資料分析型論文の史料引用における引用・解釈表現の特徴—歴史学/国際政治学/地域研究を対象に—」『専門日本語教育研究』20, pp.19-26
- 二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子 (2009) 『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』, 東京大学出版会
- 深尾百合子・馬場真知子 (2000) 「農学・工学系論文に出現した『に対して』の用法分析」『専門日本語教育研究』2, pp.14-21
- 町田洋介 (2008) 「大学生の要約文産出における傾向性の

- 検討』『東北大学大学院教育学研究科研究年報』57, 1, pp.241-252
- 三谷彩華 (2017) 「日本語教育学の論文要旨の文章構造における文体特性」『文体論研究』63, pp.57-70
- 三谷彩華 (2018) 「日本語学の論文要旨の文章構造類型－要旨における本文の要素の使用傾向－」『早稲田日本語研究』27, pp.13-24
- 宮田洋輔・石田栄美・池内淳・安形輝・上田修一 (2012) 「学術論文の構成要素と構造」『2012年度日本図書館情報学会春季研究集会発表要綱』
- 村岡貴子・鎌田美千子・仁科喜久子編著 (2018) 『大学と社会をつなぐライティング教育』くろしお出版
- 村岡貴子・影廣陽子・柳智博 (1997) 「農学系8学術論文における日本語論文の語彙調査－農学系日本語論文の読解および執筆のための日本語彙指導を目指して－」『日本語教育』95, pp.61-72
- 村岡貴子 (1999) 「農学系日本語論文の『材料および方法』で用いられる文末表現と文型」『専門日本語教育研究』1, pp.16-23
- 村岡貴子 (2001) 「農学系日本語論文における『結果および考察』の文体－文末表現と文型の分析から－」『日本語教育』108, pp.89-98
- 村岡貴子 (2002) 「農学系日本語論文の『結果および考察』における接続表現と文章展開」『専門日本語教育研究』4, pp.27-34
- 村岡貴子・米田由喜代・因京子・仁科喜久子・深尾百合子・大谷晋也 (2005) 「農学系・工学系日本語論文の「諸言」の論理展開分析－形式段落と構成要素の観点から－」『専門日本語教育研究』7, pp.21-28
- 村岡貴子 (2006) 「理系日本語論文における緒言部と結論部との呼応的関係－専門日本語教育のための文章研究として－」小泉保博士傘寿記念論文集『言外と言内の交流分野』大学書林, pp.555-564
- 村岡貴子 (2007) 「農学系日本語論文の考察部の論理展開分析－日本語論文作成支援を旨として－」津田葵先生ご退職記念論文集『言語と文化の展望』英宝社, pp.459-472
- 村岡貴子 (2014) 『専門日本語ライティング教育－論文スキーマ形成に着目して－』大阪大学出版会
- 村田年 (2009) 「文章と文型8－論文要旨における文型の使用頻度調査－」『日本語と日本語教育』37, pp.61-92
- 邑本俊亮 (1992) 「要約文章の多様性－要約産出方略と要約文章の良さについての検討－」『教育心理学研究』40, 2, pp.93-103
- 山本富美子・二通信子 (2015) 「論文の引用・解釈構造－一人文・社会科学系論文指導のための基礎的研究－」『日本語教育』160, pp.94-109
- 李国棟・王晶 (2011) 「学術論文要旨のテキスト性についての日中対照研究」『日本語文化研究』15, pp.33-44
- Swales, J.M. : Genre analysis : English in academic and research settings. Cambridge University Press, Cambridge, (1990)



## 正誤表

論文中の引用箇所、誤りがございました。以下のように訂正し、お詫び申し上げます。

頁・行	誤	正
348 頁 36-39 行	主として「専門日本語教育」の分野で（中略）「専門日本語教育」とは、「明確な特定のニーズに基づく日本語教育」（佐野 2009:10）である。「専門日本語教育」には、	主として「 <u>専門別日本語教育</u> 」の領域で（中略）「 <u>専門別日本語教育</u> 」は、「明確な特定のニーズに基づく日本語教育」（佐野 2009:10）の「 <u>目的別日本語教育</u> 」に位置付けられる。「 <u>目的別日本語教育</u> 」には、
349 頁 51,54 行	斎藤他（1977:61-86）	齊藤・西岡（2005:66-86）
349 頁 73-74 行	二通他（2009）は、「 <u>検証型論文</u> 」「 <u>論証型論文（文献解釈系）</u> 」「 <u>論説型</u> 」「 <u>複合型</u> 」	二通他（2009:5）は、「 <u>検証型論文</u> 」「 <u>複合型論文</u> 」「 <u>論証型論文（文献解釈系）</u> 」「 <u>論証型論文（論説系）</u> 」
350 頁 7-9 行	大きな違いがあり、要因として、国際集合の学術論文が、人文学の論文を多く含んでいたことを挙げている。	大きな違いがあった。
350 頁 58,62 行 354 頁 28 行	諸言	<u>緒言</u>
353 頁 62 行	斎藤孝・西岡達裕（1977）『学術論文の技法』	齊藤孝・西岡達裕（2005）『学術論文の技法 <u>新訂版</u> 』